

IIAS「ゲーテの会」ブックレット
(VOL. 01077)

「新しい文明」の萌芽を探る
ー日本と世界の歴史の転換点で、転軸機を動かした
「先覚者」の事跡をたどるー

(思想・文学分野)

無意識思想の先駆け『ライプニッツ』
ー「モナドロジー」と華嚴思想との親和性を探るー

公益財団法人国際高等研究所
<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト

本ブックレットは、2019年12月10日開催の第77回『満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」』の講演録を基に、公益財団法人国際高等研究所<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局が編集・制作したものである。

※本ブックレットの無断転載・転写を禁じます。ただし、個人としての利用の範囲内であれば、コピーしてご利用いただけます。

「新しい文明」の萌芽を探る
ー日本と世界の歴史の転換点で、転轍機を動かした
「先覚者」の事跡をたどるー

無意識思想の先駆け『ライプニッツ』 ー「モノドロジー」と華嚴思想との親和性を探るー

ライプニッツ（1646～1716）は、微分・積分学の発見で有名な数学者であり、エネルギー保存則など物理学にも大きな貢献をした万学の天才ですが、その哲学思想はあまりに奇矯なものとして、多くの理解を得られたとは言へません。しかしそれは、よく見ると実に深い洞察を含んでをり、また雄大なものでもあります。そして何より、その構想は彼の数学思想・宇宙観のみならず、政治的構想なども極めて密接な関係を持つ見事な体系をなしています。そこに我々は、仏教的世界にも通ずるものを見出すこともできますし、東西文化の境界、理系・文系の境界、有限・無限の境界、物と心の境界、生物と無生物の境界など様々の境界を、軽々と越境していくしなやかな知性を見出すことができます。その魅力に触れていただけたらと思ひます。

田島 正樹（Masaki TAJIMA）

1950年大阪市に生まれる。東京大学教養学科フランス科卒業、東京大学大学院博士課程（哲学専攻）修了、元千葉大学文学部教授、哲学者。

著書に、『ニーチェの遠近法』（青弓社 1996）、『哲学史のよみ方』（ちくま新書 1998）、『魂の美と幸い』（春秋社 1998）、『スピノザという暗号』（青弓社 2001）、『読む哲学事典』（講談社現代新書 2006）、『神学・政治論』（勁草書房 2009）、『正義の哲学』（河出書房新社 2011）、『古代ギリシアの精神』（講談社選書メチエ 2013）などがある。



目次

はじめに

- ① ライプニッツとは
- ② 30年戦争によるドイツの低迷

I ライプニッツの生涯

- (1) 宮廷顧問官として
- (2) 弱小国家としての外交
 - ① 外交交渉におけるライプニッツの能力
 - ② キリスト教統合への動きに見るライプニッツの政治的哲学

II ライプニッツを取り巻く17世紀ヨーロッパの哲学

- (1) デカルトの時代
- (2) スピノザとの議論
 - ① スピノザの思想
 - ② スピノザの『神学・政治論』
 - ③ 心身問題に対するスピノザの考え方

III 微分積分学とモナドの概念

- (1) 微分積分学の確立
- (2) 意識を形成する微小表象という考え方
- (3) モナドの概念と「宇宙の生きた鏡」
 - ① 物体におけるエネルギーの保存
 - ② 合わせ鏡の宇宙と、自己相似形のモナドの世界

質疑応答

2019年12月10日開催

第77回 満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

テーマ：無意識思想の先駆け『ライプニッツ』—

「モノドロジー」と華嚴思想との親和性を探る

講演者：田島 正樹（元千葉大学文学部教授）

（文中敬称略）

はじめに

① ライプニッツとは

本日はライプニッツという思想家、哲学者について話したい。このライプニッツこそは哲学の全歴史の中で最も偉大な哲学者である。もちろん、これには異論のある人もいるかもしれないし、アリストテレスが最も偉大な哲学者ではないかと言う人がいれば、一步譲ってもよいと思っている。アリストテレスが最も偉大な哲学者であれば、ライプニッツは2番目に偉大な哲学者である。それ以上譲るつもりはない。ライプニッツはそれほど偉大な哲学者であり、思想家であるにも関わらず、それほどは有名ではないし、それほど偉大だと思われてもいない。これは不思議なことだが、ここには様々な事情がある。

② 30年戦争によるドイツの低迷

例えば、ライプニッツはドイツの哲学者だが、主要な著作はほぼラテン語かフランス語で書いている。1646年にライプツィヒという東ドイツの町で生まれ、1716年に70歳で亡くなっているが、この背景はとても重要である。

17世紀中頃～18世紀の初めまでの間がどのような状況だったのかというと、ドイツでは30年戦争が起きている。17世紀初めの1618年～1648年までの30年間、プロテスタントとカトリックの間に血で血を洗うような激しい戦争が起きた。その前にはドイツの農民戦争もあって、ルターが反逆を起こしたのが1517年、つまり16世紀初め頃からプロテスタントの運動が起こり、それに対してカトリック側でも反宗教改革が起こって、ヨーロッパは大変な宗教戦争の時代に突入する。その総決算が30年戦争だった。この戦争で、宗教はもちろん、国も巻き込んで政治権力と宗教とが絡み合った激しい戦いが繰り返され、その結果、ハプスブルクの発祥の地とも言えるオランダが独立し、その後20～30年はオランダの黄金時代とも言える隆盛が続く。そのオランダが完全に独立国として認められるのが1648年の条約だが、ライプニッツはその2年ほど前に生まれている。

この30年戦争のために、ドイツは100年ほど近代化に遅れをとったと言われる。その頃、トップを走っていたのがオランダであり、それを直ちに追い抜いたのがイギリスだが、オランダ、イギリス、フランスはほぼトップランナーで、イギリスとフランスの間では長い時間をかけた海外の植民地戦争が繰り返され、結局はイギリスが海外覇権を握ることになる。つまり、近代化に成功した国と失敗した国で大きく明暗が分かれたのが17世紀である。その

中でドイツは近代化に大きく立ち遅れ、ドイツ国土は、江戸時代の幕藩体制のように領邦国家という封建領主たちが群雄割拠する形になって国土の統一が遅れた。ドイツが統一されたのは19世紀の終わり頃で、普仏戦争の勝利により、1871年のヴェルサイユ条約でドイツ帝国が成立する。それまでドイツはなかったわけであり、ずっと低迷していたのである。

このように、普仏戦争に勝利してドイツは統一され、急速に先進国に追いつこうとするが、その無理が祟って結局は第一次世界大戦、第二次世界大戦を招くことになる。つまり、ヨーロッパの歴史におけるドイツ問題の出発点になっているのが30年戦争である。この30年戦争の煽りでドイツが低迷していたまさにその時代にライプニッツは生まれ、それ故に後進的な地域、周辺的な地域の思想家として出発したことになる。

1 ライプニッツの生涯

(1) 宮廷顧問官として

ライプニッツは、天才に相応しい才気を次々に示していく。21歳にして学位論文を発表するが、彼は大学に身を置くことを辞退し、マインツという小さな国の宮廷顧問官として雇われ、宮廷人として一生を過ごすことになる。マインツの小さな国で、彼は主に外交問題を担当したが、当時はフランスの太陽王と言われたルイ14世がフランスの絶対王政を確立し、周辺地域にとって脅威になりつつあった。特に領邦国家であったドイツ諸侯にとっては軍事的脅威であったため、何とか外交力によってフランスを押し止めようということで、ライプニッツは外交使節団として派遣される。

その時に彼はフランスに対して、「フランスの利権のためには、ドイツに干渉するよりもスエズ地峡に派兵してオスマントルコと戦い、スエズの地を押さえることが肝心だ」と提案している。つまり、スエズの地を押さえると、そこを通じてアジアへと覇権を伸ばし、東洋の利権を独占することができるという、後のスエズ運河のような発想である。そのような外交案を持ってルイ14世を訪ねたわけだが、ルイ14世はそのアイデアを荒唐無稽だと思って拒否したので、彼の外交努力は実を結ばなかった。

それは彼が26歳の時のことだったが、ライプニッツはそのままパリに留まって、当時の一流の知識人、文化人と交わることになる。その当時のフランスは、特に数学の分野で最先端を走っていた。ライプニッツは田舎者で数学をあまり勉強していなかったので、そこで数学を勉強し、4年間ほどその最先端に触れてたちまち最高の数学者になった。そして、微分積分学を発見した。ところが、ニュートンもほぼ同じ時代に微分積分学を確立したので、ニュートンを微分積分学の祖とするイギリスの学者たちと激しく論争することになり、このことが後々ライプニッツを不利な立場に立たせることになる。

その間、マインツの国王が亡くなったために、ライプニッツは宮廷における地位がなくなってしまい、4年間のパリの生活を諦めてドイツに帰らなければならなくなった。そして、ハノーファー公の宮廷顧問官に召し抱えられる。彼は30歳にして泣く泣くドイツの田舎へ

と帰り、それ以後はハノーファーの宮廷顧問官として活躍することになるわけである。それが1676年のことで、ライプニッツは帰国の途中でオランダに寄ってスピノザに会っている。その時、スピノザは44歳だったが、画家のフェルメールと同じ1632年生まれで、44歳で亡くなってしまうので、まさに亡くなる数ヶ月前に、ライプニッツは旅行の途中でスピノザの家立ち寄り、延々と議論をした後、ハノーファーへ帰ったということである。

(2) 弱小国家としての外交

① 外交交渉におけるライプニッツの能力

ライプニッツの外交は、弱小国家で権力的、軍事的に非常に弱いところを基盤にしながらかつて強国と渉り合っていくために、国際秩序をどうつくるかという発想から生まれているところに特徴がある。

自分が大きな権力を使って世界を牛耳ることはできないという立場であるために、彼は時代遅れとも言えるようないろいろなものを使った。神聖ローマ帝国が形だけの権威として残っていたので、神聖ローマ帝国の秩序の下にヨーロッパ諸国の秩序、平和維持の機構を作り、神聖ローマ帝国をもう少し形あるものにして、それによってヨーロッパの平和的秩序を維持しようと考え、そこから当時、脅威となつてウィーンに迫りつつあったオスマントルコと対決しようとして構想している。そのために強国を糾合しながらハノーファーが糊付けの役割をするという形で、ハノーファーの存在意義をも高めようとライプニッツは考えたのである。つまり、非常に乏しいリソースを使いながら、大きな外交的成果を目指すようなトリッキーな動きをしようとしていたということである。

しかし、それは概ね失敗する。例えば、スエズ覇権という大きな野望によってフランスの軍事力をドイツから逸らそうとするが、失敗している。後にその野望を実現しようと試みた者が出てくるが、それがナポレオンである。ナポレオンはフランス革命の上げ潮に乗ってスエズへと群を派遣したが、結局は元に戻って、最終的にはスエズの地はイギリスが押さえることになり、フランスは東洋における植民地戦争でイギリスに敗れることになる。

それでも、そのスエズが世界帝国を樹立するためにいかに重要な地にあるかということを見抜いていたことは間違いない。そういう点では、非常にリアリスティックな目を持っていたと言える。しかし、それはリアリズムだけではなく、ヨーロッパのキリスト教世界をいかにして平和的、安定的に維持していくかという広大な理想主義と合せたようなリアリズムであり、そういう見通しを彼は持っていたのである。

② キリスト教統合への動きに見るライプニッツの政治的哲学

そこで、ヨーロッパがカトリックとプロテスタントの間で対立戦争を続けていてはオスマントルコに対抗できないので、教会統合をしなければならないとライプニッツは考えた。この教会統合という目標こそ、彼の非常に重要な政治的な野心の一つである。ハノーファーという限られた力を基に、ヨーロッパ全体を見通してキリスト教世界の統合を図ろうとし

た点では、非常に野心的な試みをしていると言える。

もちろん、これは簡単には実現しなかった。ちなみに、このアイデアは、数百年後 EU の理念に生かされた。そういう広大な理想は概ね失敗に終わるわけだが、彼はプロテスタントとカトリックの間に横たわる亀裂を作り出した反感や憎しみがどれほど大きいものであるかということを理解していなかったのではないかと思われる。彼には、対立や抗争や憎しみというものを「大したことのないもの」と考えるきらいがあり、そういう点では、彼は悪のリアリズムを理解していない思想家だと言えると思う。

地域の独立性と全体の平和、調和の両方を実現すること、つまり、一つのグローバルスタンダードで塗り固めるのではなく、地域それぞれの個性を活かしながら全体の秩序の弱小でありながら味のある部分として加わることを、彼は目指したのではないか。そこに彼の政治的な哲学もあるが、それがまた彼の形而上学と一致した形の政治哲学になっていると言える。

II ライプニッツを取り巻く 17 世紀ヨーロッパの哲学

(1) デカルトの時代

ライプニッツの哲学の前提として考えなければならないのは、当時はデカルトの時代だったということである。デカルトは 1650 年頃に 50 代で亡くなっているが、その少し後にライプニッツは哲学を始めたことになる。デカルトの哲学はガリレイによって始められた物理学のような世界観を正当化し、裏付けるような哲学である。つまり、それまでの自然はアリストテレスが考えたような生命の自然であり、目的論的に説明されるような自然観だったのに対して、ガリレイはピサの斜塔の実験のような物の単純落下が時間と距離との相関関係でどのように記述されるかという運動の法則性を記述して、運動の目的や運動の意味は問題にしないような方法論をとった。そういう物質世界の中から意味や目的を剥脱するような形で最先端の物理学は進んでいったわけである。

その時に、デカルトはそれを基礎づけるために「自然界は機械論的なもので、そこには意味も目的もない。意味や目的を与えるのは我々の意識に過ぎない」と考えている。つまり、世界から生命的な意味を奪い取って、すべてを機械のように記述し、世界をただ数学的な秩序だけで記述する対象にしてしまう。それに対して、それを記述する意識というものは数学を構成していく能動的な知性でなければならないので、意識の中における感情的な要素を切り取って観念を意識的に構築するような、理想形としては、幾何学、数学のモデルに従って合理的に我々が意味を構成していくという考え——魂と世界との間の際立った二元論をデカルトは打ち立てたわけである。

もちろん、それは近代科学を基礎づけるためには必要なことだったが、それによって、俄かに精神と身体との関係が不可解なものになってしまう。例えば、我々が何か意志することによって身体を動かす、手を挙げようと思って手が挙がるような、心と身体との連関性自体

も怪しくなってしまう。そういうことを説明するのはなかなか難しいので、それ以後の17世紀の哲学者は心身問題に腐心することになったわけである。

(2) スピノザとの議論

その中で、スピノザは画期的なアイデアを思い付いた。実は、ライプニッツとスピノザは似たようなことを考えていたので、ライプニッツの考えを理解するにはスピノザを媒介にすると良いと思う。実際にライプニッツはかなりのところを自分独力ですでにスピノザ的に考えていたと思うが、最晩年のスピノザと会って、その数時間後にスピノザのアイデアの根本的なところを直ちに吸収したのではないかとも思われる。

① スピノザの思想

スピノザがどういう思想家なのかを理解するのはなかなか難しい。実は、スピノザは哲学の素人であり、哲学的素養はあまりない。それにも関わらず、アマチュアの哲学者として哲学的なジャーゴンを使って著作を書いているので、本当に哲学の概念を理解している人から見ると、いかにも素人臭いことを言っているように見える。その点で、哲学者よりも文学者や一般思想家の中にスピノザに対するシンパシーを抱く人が多い。そのため、スピノザの哲学を哲学的に理解するのは難しいとも言えるのである。

ただ、私がスピノザをアマチュアの哲学者と言うからといって、スピノザの哲学的意義がないわけでは決してない。スピノザが当時の哲学とは全く違う発想をしていたということが重要である。彼は哲学の学校に行っていないので、当時の哲学の伝統とは全く違うところから着想を得ているのである。

スピノザは、アムステルダムのユダヤ人社会の裕福な貿易商の息子として生まれ、幼い頃よりポルトガルやスペインから亡命してきたユダヤ人の社会で旧約聖書の律法を詳細に学んだ。これはトーラーやタルムードと言われ、神学とも法律学とも言えるような、ヘブライ語で聖書を読んで律法の細かいことを議論するような学問である。

10代の頃のスピノザは、トーラーの学院の中で非常に優秀な学生だったが、24歳頃、ユダヤ人社会から大破門されている。破門にはいくつかの種類があるが、その中で一番厳しい破門が大破門であり、それによって自殺する人も多かった。ユダヤ人社会の中で生まれ育ちながら、ユダヤ人社会から完全に見捨てられると生きていくことができない。スピノザの10年ほど先輩のダ・コスタという人も、一度破門を受けたが、生きてくことができないのもう一度ユダヤ社会に戻り、結局はまた破門されて自殺している。そういう意味で、スピノザは生き延びた破門者なのである。

当時、スピノザの教養の基盤は旧約聖書にあったので、旧約聖書を徹底的に読んで、旧約聖書のラビの先生方と対立したものと思われる。自分の方が旧約聖書をよく読めていると自負していたので、ラビの先生方の権威を認めず、自分の学説を堂々と主張したのではない

か。そういうことは記録としては残っていないが、その結果として、彼が大破門を受けたという歴史的事実だけが記録されている。これが意味するのは、彼は哲学の教養よりも旧約聖書を読んでその意味を解説することに青春時代をかけていたということである。つまり、テキストを読むとはどういうことかということ徹底的に勉強している。例えば「魂」を意味する言葉がテキストではどのように使われているかを徹底的に調べると、ある文脈では「魂」という意味でも、他の文脈ではただの「風」を意味していることなどが分かる。そういう文脈に応じて意味を解説しなければならないとスピノザは『神学・政治論』の中で言っている。

② スピノザの『神学・政治論』

スピノザが『神学・政治論』を書いたのは、カルヴァン派との論争のためだった。アムステルダム社会の中で軍事的な脅威が高まってくると、カルヴァン派とコレギアント派、過激プロテスタントと穏健プロテスタントの間で対立が起こる。スピノザは穏健プロテスタントの友人が多かったが、彼らの多くは裕福なブルジョワだった。それに対して過激プロテスタントのカルヴァン派は特に軍隊に支持者が多く、軍事独裁がオランダ社会の中で暗い影を落としてきていた。オランダのブルジョワジーたちは、オランダが成熟したブルジョワ社会として発展するためにはリベラルな思想環境が必要だと考えていたが、それに反対する過激派が出てくるので、それに対抗する形で、スピノザは友人たちのためにカルヴァン派を批判する論文を書いたわけである。それが『神学・政治論』であり、聖書を解説するための本である。

実際に読むとあまりおもしろくはないが、重要なのは主張の内容ではない。例えば、スピノザは「聖書には道徳に反するようなことは何一つ書かれていない」というような主張をしているが、我々がそれを読んでもつまらない印象しかない。ただ、そういう主張に至る方法論が重要である。カルヴァン派のような狂信的な宗教会派に対して「それは科学的ではない」とか「常識から外れている」と言っても、彼らは宗教的な頭で凝り固まっているので聞く耳を持たない。それを論駁するには、同じように権威としている聖書というテキストに頼るしかない。つまり「あなたたちの主張は聖書そのものに反している」と言わなければならない。それにより、聖書解釈が政治闘争の戦場になったわけである。

スピノザは聖書解釈の方法として、彼が幼い頃から勉強してきた言語学的手法を駆使し、政治闘争をしている。それは「聖書以外のものには頼らずに、聖書だけから聖書を読む」という解釈である。つまり、他の科学や常識というものに依拠せず、テキストをテキストだけで読むという態度である。それはある単語が「ここではこのような文脈で使われている」「あそこではあのような文脈で使われている」というように、すべての文脈を照らし合わせながら、その意味をつきとめることになる。これは未開民族の言語を我々が勉強する時にとるような手法であり、そういう手法を彼は哲学的手法として確立したと言える。つまり、スピノザは哲学のすべての領域をそういう手法で考えようとしているわけである。

③ 心身問題に対するスピノザの考え方

例えば、我々の心とはどういうものか？ 我々の心の中には、いろいろな刺激や感覚や感情が電気信号のように次々に浮かんでくる。我々の神経を電光掲示板のようなものだとすると、電気信号が暗号のような形で点滅しながら次々に流れてくるイメージは、我々の心の表現としてふさわしいものだろう。

つまり、初めから意味があるわけではなく、初めにあるのは、我々の身体、あるいは神経の上を走る意味不明な暗号である。例えば、乳児は刺激を受けても、それがどのような意味を持っているかを最初は理解しない。コップを見てもそれがコップだとは考えない。それどころか、それに対して焦点を合わせることもなかなか難しい。焦点が合っても、次々に流れてくる信号が触覚なのか視覚なのか聴覚なのかということすら乳児は理解しない。つまり、乳児にとって、最初は意味のない信号でしかないわけである。その信号の中から意味が生まれるには、対象の形を○や△という意味として、乳児が我々の感覚を解読していくことが必要になる。恐らく幼児は初期の段階にそれをしていると思う。そのようにして、我々の身体を走馬灯のように流れていく電気信号のような暗号を、すべて一つのテキストとしてまとめていくと、それらの暗号を解読するような形で、乳児はある時に意味を見出していく。そういう心に関するイメージをスピノザは持っていたと思う。

例えば、最初は言葉というものが分からなかったヘレン・ケラーが、水を「ウォーター」という記号として対応することを学ぶ場面があるが、それと同じように、子どもにとっては「水」ということすら分からないのである。ヘレン・ケラーは少女の時に水を触ってそれが「水」だと理解するが、「ウォーター」という記号が「水」を意味するという事は理解していない。しかし、乳児にとっては、水を触ることが何を指していることなのかもはじめには分からない。したがって、水を見ても何かの対象を見ているとも感じない。

そのようにすべてが暗号である時に、そこから暗号と暗号をつなぎ合わせて暗号を解読していくように、我々の身体の刺激がある日突然、意味を帯びて、世界を表現しているものとして見えてくるのだとスピノザは考えたのである。それはデカルトが考えたような「魂」の理解とは全く違う。デカルトは「魂は最初から自分が何を考えているかを明晰に意識している」というところから「魂」というものを考えている。しかしながらスピノザは、意味を理解するということは、そもそも暗号解読から始めてそこに意味が表れると考えているので、心身問題というものが起こり様がない。つまり、我々の身体の中に発する刺激の解読の結果が心になっているという考え方である。

もちろん、我々の身体の中には解読不可能な、あるいはまだ解読されていないような刺激、「虫の知らせ」のようなものもある。「身体がどこかおかしい」とか「感覚が少しおかしい」とか「何か変だ」とか、そういう「虫の知らせ」のような感覚があるわけだが、その時は我々が感じている刺激の意味ははっきりとは分からない。つまり、我々は慣れ親しんだ知覚に対してはそれが何の刺激なのかを理解できるが、慣れ親しんでいない感覚が突如起こった時は「これは何か」と理解できない。それはまだ解読されていないからである。

あるいは、背中に何か刺激を受けた場合、背中に文字を書かれてもそれが何の形なのか分からないこともあるが、それと同じように、我々の神経の中には十分に意味が解読されていないものがまだまだたくさんある。慣れ親しんだ刺激に関しては「これは○だ」「△だ」というように「これはあのパターン」と理解できる。そして「このパターンが来ると、次はこれが来る」というようなことも分かる。例えば、ビフテキの匂いがしてきたら、次にビフテキを食べるという味覚の刺激が来るとか、ビフテキの匂いがする方へ歩いて行くとビフテキが近くに見えてくるとか、ビフテキが見えてきたら、それを手に取れば食べられるとか、そういう刺激の連鎖が後に習得されていく。そういう形でスピノザは心身問題をほぼ解決したわけである。

そのアイデアをライプニッツは受け継いでいる。そして、ライプニッツはそれをスピノザよりも一層精緻な形で自分のものにした。なぜそういうことができたかということ、4年間のパリの生活の間に微分積分学を確立したからである。

III 微分積分学とモナドの概念

(1) 微分積分学の確立

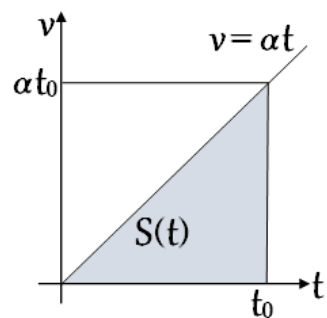
微分積分学がライプニッツの思想形成に果たした役割は非常に大きい。

微分とは微小なもので、 $\Delta y / \Delta x = \{f(x + \Delta x) - f(x)\} / \Delta x$ という式は Δy を Δx で割る形になっているが、関数に接線を引くと微小な部分の Δx の変化に連れて Δy も変化する。この変化の比、すなわち線分の傾きをこの式が表しているが、 Δx をできる限り小さくしていくと接線の傾きになる。この $\Delta y / \Delta x$ の極限值が微分である。微分は、今は dy/dx という形で書かれているが、これはライプニッツが開発した記号で、なぜ分数のように書かれているかということ、元々は Δy を Δx で割ることの極限值を取るからである。この記号法は便利なので、今日では多くの場合ニュートンの記号法を使わずにライプニッツの記号法が使われている。

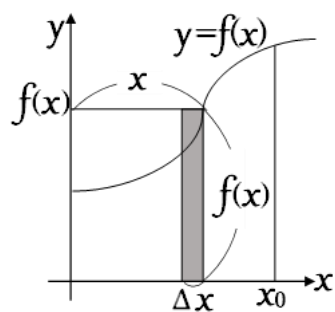
例えば、 $y = \cos^2 x$ の式を微分する場合、媒介変数 $u = \cos x$ とおくと $y = u^2$ となる。この2つの式を基に、 dy/dx を計算する時に dy を du で微分して du を dx で微分する。つまり $dy/dx = (dy/du) \times (du/dx)$ となり、 y を u で微分したものと u を x で微分したものの積に等しいことが知られている。これは媒介変数の微分の場合である。 $y = \cos^2 x$ の場合なら、まず $u = \cos x$ を微分すると $-\sin x$ 、 $y = u^2$ を微分すると $2u$ となり、結果として $y = \cos^2 x$ で y を x で微分すると $-2\sin x \cos x$ になる。このようにできるのは非常に便利である。つまり、 $dy/dx = (dy/du) \times (du/dx)$ は dy を du で微分したものと du を dx で微分したものを掛けるわけだが、そうすると分数の計算のイメージで、結果として分子に dy が出て分母に dx が出ているように見える。これはライプニッツの記号法がいかに便利かということを示している。

積分の場合は微分の逆だと言われる。物が単純に落下する運動は等加速度運動と言われ、

速度 v と時間 t の相関関係は等加速度運動では単純に増加していく $v = \alpha t$ という一次関数の形を取る。これはガリレオが発見したわけだが、これを微分すると、加速度が α で一定の形になる。 t がいくら変わっても加速度はずっと α の値を取るということである。つまり、 $v = \alpha t$ を t で微分したら α が出てくるので、この関数が微分した結果となる。では、積分するとどうなるかという、 $S(t)$ は面積なので高さ αt_0 で $S(t) = 1/2 \alpha t_0^2$ になる。つまり、 $v = \alpha t$ を積分すると $1/2 \alpha t^2$ になり、 $v = \alpha t$ を微分すると α になる。このように積分と微分は逆方向の形で表される。



ライプニッツは関数 $f(x)$ の積分を $\int f(x) dx$ と書いている。これがライプニッツの記号法だ。学校で積分を習った時にはなぜここに dx が付くのかと不思議に思ったが、ライプニッツの元々の発想は級数の考え方からきている。つまり、 $y = f(x)$ という関数の面積 $S(x)$ の計算は、面積 $S(x)$ の部分をたくさんの短冊形の長方形に分割して、その長方形の合計を出すと



$S(x)$ の面積に等しくはなくても近づいていく。そして、この短冊形の幅 Δx を段々狭くしていけば、ついには面積 $S(x)$ に収斂していくだろうという発想である。

級数による積分（等加速度運動の場合）

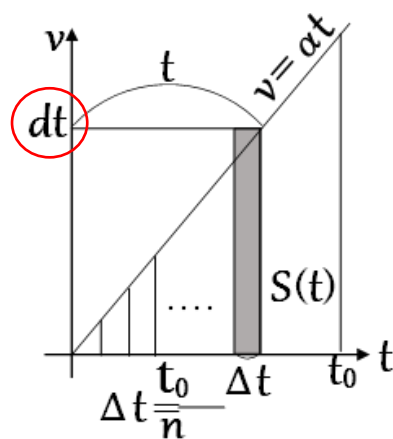
$$t_0 \text{ を } n \text{ 等分して } \Delta t = \frac{t_0}{n}$$

$$S(t) \doteq \sum v(t) \Delta t \\ = \sum \alpha t \Delta t \quad (t = k \Delta t)$$

$$\begin{aligned} k \text{ 番目の短冊形の面積は} \\ \alpha t \Delta t &= \alpha (k \Delta t) \cdot \Delta t \\ &= \alpha k \cdot \Delta t^2 \\ &= \frac{\alpha k t_0^2}{n^2} \end{aligned}$$

$$S(t_0) \doteq \sum_{k=1}^n \frac{\alpha t_0^2}{n^2} k = \frac{\alpha t_0^2}{n^2} (1+2+\dots+n) \\ = \frac{\alpha t_0^2}{n^2} \cdot \frac{n(n+1)}{2} = \frac{1}{2} \alpha t_0^2 \left(1 + \frac{1}{n}\right)$$

$$\text{ここで } n \rightarrow \infty \quad \text{つまり } \Delta t \rightarrow 0 \text{ とすると } S(t) = \frac{1}{2} \alpha t^2$$



ここで $\sum v(t) \Delta t$ の形から $\Delta t \rightarrow 0$ を経て極限值を取ったものが $\int v(t) dt$ であるわけで、級数の和であるという意味がそのまま記号の形に表現されているわけだ。

これが数学的にどのように優れているかということは、私はその専門ではないのでここでは説明しないが、ライプニッツ自身の哲学が、スピノザの哲学を受け継ぎながらそれを精緻化していくうえで、これは非常に重要なものになっていると言える。

(2) 意識を形成する微小表象という考え方

ライプニッツは我々の意識経験のようなもの、例えば、寄せ来る波の音が聞こえてきた場合、それは水滴の一粒一粒が落ちる音の合成に過ぎないと言っている。一粒の水滴が落ちる音は聞こえないが、それを合成すると打ち寄せる波の音になるということである。これは微小なものを集積し、それを積分していることになる。我々の意識は、本当は聞こえないような微小なものを集積した積分結果だというわけである。それをライプニッツは「微小表象 (petites perceptions)」と言っている。微小表象は、それ自体は意識されないが、無限に多くのものを集積すれば意識される。

例えば、バイオリンの音色が響いてくると、我々は「これはバイオリン特有の音色だ」と聞き分けることができる。しかし、実際にはバイオリンの音色は、単調な正弦波の音が倍音を重ね合わせただけのものである。すべて正弦波の重ね合わせという形で表現することができる。実際にオシロスコープという機械で調べると分かるが、一つひとつが正弦波であるように分析される。これはフーリエ解析という数学的技法にある。しかしそういうものがどういう正弦波から成り立っているかは判明には意識されない。それでも、その重ね合わせた結果、つまり微小表象 (petites perceptions) が合わさった全部の結果が我々に意識される。したがって、意識と意識されないもの、意識されているものとされないものは連続している。その連続性を結ぶのが微分積分学であり、積分をそのまま形而上学へ翻訳しているようなものである。

(3) モナドの概念と「宇宙の生きた鏡」

我々の身体は、アンテナのような形で世界から様々な因果的な影響を受け、それによって震えている。その震えがどのような意味を持つのか、体温が上がったのか、寒いのか、あるいは打撃を受けたのか、すぐには分からないが、経験を積んでいくと解釈され有意味に理解できるようになる。ピフテキの匂いの後ピフテキの味が続くような経験を積み、我々はこの匂いがピフテキを食う事につながるというような意味を得るだろう。こうして、単なる刺激印象がやがて意味を帯びるわけだ。

しかし、そのように考えると、我々の身体を震わせている、あるいは神経に影響を与えているものは、意識されたものだけではないことが分かる。アンドロメダ星雲の中で何かの爆発が起こっても、遠いのももちろん我々には見えない。しかし、恐らく電波は届いていて、

その電波が我々の身体を震わせる。つまり、アンドロメダから届くような非常にわずかなものですら我々に影響を与えているということであり、気づかないけれど、そういうものすべてが我々の身体に影響を与え、その結果、身体が震えているのである。

それはライブニッツによると、世界のすべてのものが相互に共鳴し合って、我々自身の身体を震わせているということであり、我々の魂は身体というアンテナの受信機が解読した意味に過ぎないことになる。ライブニッツはこれを「モノド」と言っているが、モノドとしての魂は、宇宙全体からのすべての影響を受けており、宇宙のすべてを映し出しているので「宇宙の生きた鏡」と言われる。自分自身の Point de Vue(Point of View)、つまり自分自身の観点に従って宇宙のすべてを映現しているということである。我々の魂は見ていると思っているものだけを見ているのではなく、すべての宇宙の影響を受けており、それが響いて、意識はしないが映し出している。そういうものとして見えてくるわけである。それは驚くべきことである。

① 物体におけるエネルギーの保存

我々は生きた魂としてそういうことを映し出しているが、それは動物も同じである。動物は我々ほど賢くはないかもしれないが、同じように影響を受けているので、動物の魂もすべてを映し出している。植物も同じである。では石はどうかというと、石も同じである。したがって、生きたものと生きていないものとの間も連続的に繋がっている。

これは物体というものについてライブニッツが考えている特徴による。デカルトはただ広がりを持っていることだけが物体の特徴だと考えたが、ライブニッツは「それは物体ではない。ただの空間である」と言っている。空間と物体の違いはどこにあるかということ、物体は凝縮しているので、それを押すと反発する。あるいは強く推すと物体は押された所だけが凹むわけではなく、石を押すと石ごと動く。豆腐を押すのとは訳が違う。空気なら押されてもあまり動かないかもしれないが、石は空気よりも豊かな存在力がある。それが凝縮力である。

つまり、部分と部分が力を持って引き合っているわけであり、バネの塊のようなものである。物体は押すとわずかに凹み、そして凹むとそれを修復しようとする力が働く。バネが縮んで再び伸びるように、ボールを打つとボールが凹んで、それを修復しようとする力によってボールは飛んでいく。これは運動エネルギーが、ボールが凹むというポテンシャルエネルギーに転換し、そのポテンシャルエネルギーを発散することによってボールが飛ぶという運動エネルギーにまた転換していることを示している。

物が凝縮するというのは、そういう形でポテンシャルティを持つことができ、エネルギーをそこに溜めることができるということである。エネルギーを溜めることができるのは、それらが凝縮性を持っているから、単なる空間ではなく物体だからである。そして、物体はその中にエネルギーを溜めることができるから、世界から影響を受けた痕跡を保存している。それは、ある意味では記憶と同じ、魂と同じである。生命というのは自分自身を維持する力であり、だからこそそれを保存する凝縮力を持っている。ライブニッツのモノドは、そうい

う形で物体にも適用されるし、精神にも適応される。それらは程度の差はあれども連続している。

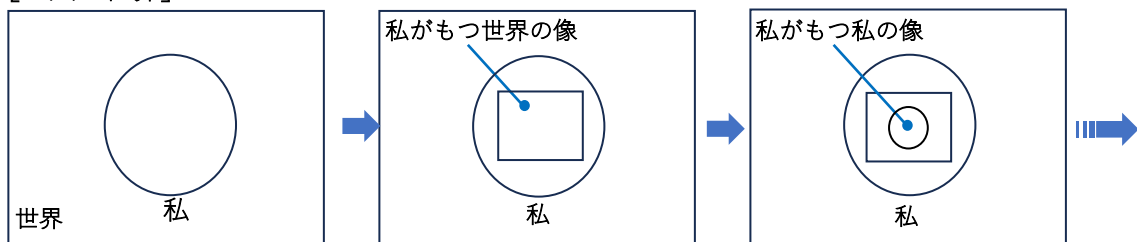
② 合わせ鏡の宇宙と、自己相似形のモノドの世界

さて、それだけでも素晴らしいが、もし宇宙全体がモノドからできているとすれば、どうなるだろうか。例えば、ここに宇宙があって、そこに二つのモノドがあるとする。一つが自分、もう一つが他人である。このモノドは宇宙全体を映し出していなければならないので、自分のモノドは「向こうに他人がいる」ということを映し出す。しかし、他人を映し出しているだけではなく、そこには自分もいるわけであるから、自分のモノドには他人の像と自分の像が映し出されなければならない。そして、同様に他人のモノドの方も私の像と相手の像が映し出されている。

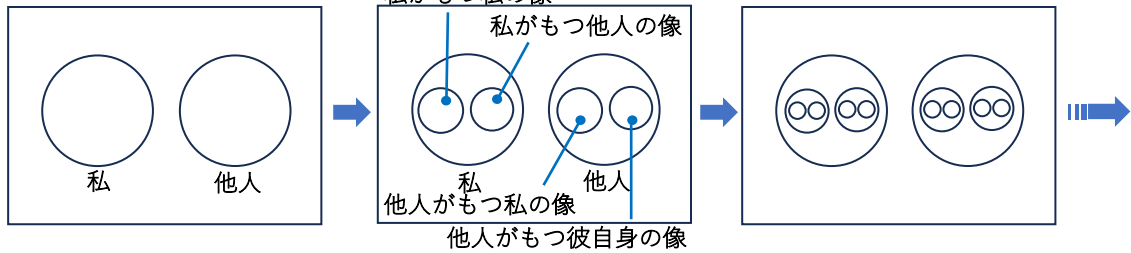
では、これで宇宙のすべての姿が完成したかということ、とんでもない。私のモノドの中にある他人の像は、二つのものを映現しているので単なる丸であるわけがない。つまり、私のモノドに映し出されている他人の像の中には二つの像が入り込んでいなければならないし、相手も同じようにこのような私の像を映し出さなければならない。ところが、これで終わりではない。自分のモノドに映し出された他人の像に映し出された自分の像にも同じように像が映し出されることになり、次から次へと像が映り込んでくる。これは、たった二つのモノドであっても無限だということを意味する。リアルな無限がこの中に凝縮されていなければならないということである。

これは完全な鏡であれば、合わせ鏡のような形になる。宇宙というものは合わせ鏡によって構成されているので、自分自身の姿と他人の姿のすべて、そのすべてがすべてを映し出している、そして、そのすべてがすべて凝縮されていなければならないことになる。現代数学ではこれをフラクタルというようだが、あるいは自己相似形で、自分自身に相似である。なぜかという、自分のモノドに映し出された像だけを取って見ると、その部分は全体の相似形をなしている。もちろん有限にとどまる限りは全体の相似形にならないが、これを無限に続けていけば自己相似形になる。つまり、彼は数をどんどん大きくできるといった可能的無限にとどまらず、リアルな無限というものが実在の世界そのものと考えているのである。

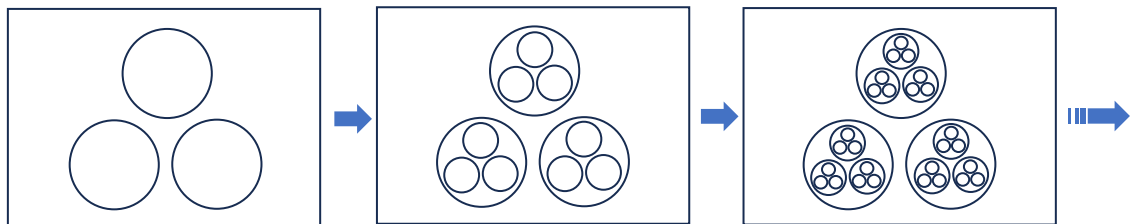
[一人の世界]



[二人の世界]



[三人の世界]



このようにして、部分と全体がそっくり相似の形になっているのがモナドの世界である。これは仏教で言うところの仏性がすべてに宿っているという発想と同じである。つまり、宇宙のどのような片隅にも、その中に魂があり、その魂は宇宙のすべてを映し出している。どの部分にもどの部分にも全体が宿っている。ミクロコスモスはマクロコスモスを映現しているという発想である。

これは実に驚くべきことである。私はこのようには考えないが、それはそのまま真実であるにはあまりにも美しすぎるからである。宇宙はどの部分をとってもそれ自身が無限の豊饒に満ちており、生命で満ち満ちている。「そんなことがあるわけではない」と私は思うが、凡庸な人間だからそう思うのであって、ライプニッツは凡庸ではなかった。大天才である。したがって、ある種の数学者のように真実よりも美しさを求める。そういう意味では、ライプニッツは単純な論理で突き進むとか、真理だけでよいというタイプの人間ではない。真理よりも美しさの方が大事である。神が創ったこの世界であれば、美しくないはずがないと彼は考えている。とても信じ難い万華鏡のような世界をこの宇宙の中に見出していることになる。この点でライプニッツは、馬鹿の一つ覚えのように「エヴィデンス」にしがみつくような凡庸な連中とは根本的に違っていた。

私自身は仏教の考え方にそれほど詳しくないので大風呂敷を広げたような話にはできないが、ライプニッツは大体が大風呂敷で、ほんの小さなことをきっかけにそれを全宇宙へと広げていく。そして彼の構想の最も完全で美しい姿を「これこそ真実だ」として嘘八百を並べ立てる。ライプニッツとはそういう哲学者である。

質疑応答

- Q1 ライプニッツと華嚴經の親和性は何か
- Q2 ライプニッツは善と悪をどのように捉えていたのか
- Q3 ライプニッツは宗教の統合をどう考えていたのか
- Q4 いかにして今の社会にライプニッツを生き返らせることができるのか
- Q5 臨床心理学における無意識についてライプニッツをどう考えるか

Q1 ライプニッツと華嚴經の親和性は何か

ライプニッツは、西洋と東洋をつなぐ結節点としてのヒントとなる、宗教も哲学も科学も統合するような、その目標や土台になる考え方だと思う。

また、先生の講義の大きな柱はライプニッツと『華嚴經』の相似の部分だと思うが、それへの言及が少なかった。ライプニッツが悪のリアリティに弱いという点については、悪がどこから由来するかということの弱さが歴史的に言われているが、『華嚴經』においても悪の問題の追及は弱い。理論的には宇宙論が構造的に緻密に表されているが、人間としてのリアリティ、実存を考えれば、悪の哲学抜きには考えられない。そういう意味では『法華經』が悪の哲学に強いが、ただし文学的になってしまって構造的に弱い。

ライプニッツの場合は、キリスト教の中では異端に類すると思う。そういう意味では『華嚴經』も上座部仏教、般若心經の連盟を考えると異端的な考えであって、『華嚴經』が釈迦の若い時の理論だというのは歴史的には違うような気がする。『華嚴經』が発達したのはインド北西部で、二元論的な光と闇の哲学がヒントになっていると思うが、その悪の部分を取ったことによって『華嚴經』もライプニッツも異次元的に投光していただけたと思う。その辺りは我々と共通する部分もあるので、その辺りの講義もまた伺いたい。

(田島)

『華嚴經』については詳しくなく、皆さんの方が詳しい方がおられると思うので話は少なかったが、ライプニッツが異端であるというのは確かだと思う。

ライプニッツが仏教に比較的近いと私が感じているのは、ライプニッツは「世界は神が創っている」と考えているが、あまりにも完全なものと考えている点である。これ以上完全なものはないほど完全な存在と考えている。それは最善律と言われ、神は最善なものを最善だという理由によって選んだのであり、だからこの世界になった、それよりも良い世界はあり得ないと彼は考えている。つまり、すべてものには理由があるように、この世界が存在するにはそれなりの理由があって、それは神が最善だからこれを創ったという理由であると捉えている。

しかし、もし本当にそれほど完全なものであれば、神というものは要らないのではないかという気がする。この世界が不完全だから我々は神を必要とし、この世界の不完全性や人間が不十分で罪深い存在であるからこそ、我々はこの世界に安住することなく、この世界から

外に出なければならない。これがエクソダス（もともと「出エジプト」の事を意味する）であって、ありのままの世界に安住しない（脱自）というのがキリスト教の根本のスピリットの中にある。

そういう点から見ると、ライブニッツは安住している。この世界は完璧だから、この世界に不満を言うてはいけないのである。ライブニッツは実践的な政治家でもあったが、この世界が不十分だと考えているわけではなく、思い違いをして不十分だと考えることを止めなければならないと考えている。その点では仏教も似たところがあって、我々はこの世界が苦しみに満ちた罪深いものであり、悪に満ちたものだと考えているが、それは錯覚で、我々の捉われた心、狭い心でものを見ているから不十分に見えるだけであり、本当に悟れば、この世界がそれ自体において仏の世の中だということが見えてくるはずだという立場に近いのではないかと私は想像している。

したがって、その点で、ライブニッツはキリストにとっては異端である。エクソダスではなく、この世界の素晴らしい点を鑑賞する立場にいるからである。キリスト教は、この世界のすばらしさを鑑賞する立場ではなく、世界は崩壊に瀕していると見ているので、崩壊に瀕している世界を自分の身をもって救わなくてはならない、自分が神によって呼びかけられているのだから、その呼び掛けに応えるのがキリスト教徒の任務だと信仰を捉えている。それとライブニッツは違うという点で、ライブニッツはキリスト教の中では異端である。彼はキリストに対してリップサービスをしているが、ライブニッツ自身がキリスト教を真面目に考えていたかどうかはかなり怪しいと思う。

もう一つ言えば、仏教の中にも実践的な情熱がないわけではなくて、決してこの世界がこれで良いと甘んじているわけではないと思う。宮沢賢治は仏教徒ではあるが、日蓮宗で激しい政治的情熱を持っていた。しかし、そういう仏教徒における実践的情熱がどこから生まれるのかは、私は十分に理解していないところがあるので、仏教というものを根本のところまでまだ捉え切れていないと申し上げなければならない。

Q2 ライブニッツは善と悪をどのように捉えていたのか

悪のリアリティに対するライブニッツの態度が厳しさを欠いているということが問題になっているが、私の考え方では、キリスト教の場合は善と悪は相容れない、対立するものとしてある種非常に厳しいところがある。ところが、ライブニッツは悪と善の関係を相対的なものとして見ているのではないか。

数学の話が出たが、ライブニッツは二進法を考えている。ヨーロッパのキリスト教文化では悪は欠けているものであり、欠けているものは意味を持たない。ライブニッツは二進法を考えた時に 0 にも 1 にも同じような意味を持たせている。それがライブニッツの悪に対する考え方をより相対化しているところがあると感じるが、どう思われるか。

(田島)

キリスト教は善と悪を厳しく二元論的に対立させて考えると言われたが、それは誤解だ

と思う。キリスト教は基本的に善と悪を非対称的なものと考えている。基本的に、悪は実在しないというのがキリスト教の正統的な考えである。それは、神が悪を創ったということがあってはならないからである。したがって、この世界が不完全だというのは、神ではないから不完全であるけれども、それを完全なものであってほしいというのではないものねだりである。しかし、それは悪がリアルに存在するということではない。不完全で中途半端で不都合なところがあるという点で何か欠損しているし、充分ではないという意味でこの世界は課題を抱えていると言った方がよいかもしれないが、そういうまだ解決困難な多くの欠陥があるということである。しかし、欠陥は穴なので、悪がそこにリアルに存在しているわけではない。

善悪の二元論という立場に立つ宗教（マニ教とかカタリ派）とキリスト教は、長い間徹底抗戦をしてきた。そこには正統なキリスト教神学と異端的なキリスト教があり、異端の場合は悪のリアリティを極端に持つ。そのため、キリスト教の内部でも悪にどのくらいのリアリティを置くかによって宗派が分れる傾向がある。

カトリックは悪のリアリティを甘く見る傾向があり、悪のリアリティをカトリックよりもさらに甘く見るとペラギウス主義という異端になる。ところが、カトリックの中で最も悪のリアリティを考えるのがジャンセニストで、例えば、パスカルの場合などがそうだが、カトリックの中でも悪のリアリティを真剣に考える傾向がある。このような人たちはカトリックから排除され、結局はカトリックにとって異端という扱いを受けた。

プロテスタントの人たちは悪をさらにもっと深刻に考える傾向があり、あまり人を信用してはならないという生活態度をとる。人は、たとえ自分の友人や家族であってもいつ欺くか分からない、あるいは思いもよらぬ罪深い存在であるか分からないので、そういう人を信頼するよりも、直接神とつながるべきだというのがプロテスタントの考え方である。その意味で、プロテスタントの人たちは、キリスト教の中では悪を重んじる人たちである。つまり、悪を重んじるキリスト教と悪を軽んじるキリスト教があるが、どんなに悪を重んじるキリスト教であってもマニ教的善悪二元論は異端とされている。悪を神が創り出したということ認めてしまうと、神自身の中に悪意というものがあることになる。そういう異端は様々に出てくるが、そういうものとの戦いを通じて正統キリスト教の教義は作られている。

そういう意味では、悪とは実在的なものではなく、一つの仮象に過ぎないという点で、ライプニッツもその正統には一応合致していた。しかし、それにも関わらず、人間の罪深さをライプニッツは軽く見ている傾向がある。例えば、自分に得にならないにも関わらず、人を憎んだり、嫉妬したり、人の足を引っ張ったりするところが人間にはある。それは悪魔的な要素だと思うが、もし人間が合理的であれば嫉妬することもないし、憎むとは愚かなことだと分かるのでしない。しかし、どうしても憎しみがあって、自分が不幸になってまで人を貶めてやろうという気持ちが人間の中には芽生える時がある。それは人間の自由意志の誤った使い方によるものだが、そういう人間の自由を重んじて、挙句の果てに人間が悪意を持って、ついには自分自身をも否定するような、自分を殺してまで相手を傷めつけてやろうとい

うような気持ちに傾いていく傾向、これが深い意味での悪というものである。

ライプニッツはそういうものを軽視しており、本来そういうものはないと言いたいわけである。したがって、当時の宗教的な対立も、皆が深刻になって対立している中で、それぞれの宗派が主張していること自体は正しいと彼は言う。どういう主張も、それを主張していることにおいて根本的に間違っていない。相手を否定する点だけが間違っている。相手の主張の中にはそれぞれの眼目があって、一面的ではあるかもしれないが、真理ではある。したがって、Point de Vue として相手の見方からはそれが真実であり、それが相手の主張の実質だというように「彼の論点の中には汲むべきところがあるので、我々とは違っているからと言って全面否定するのはいけない」という態度をとる。そういう意味では、一見対立していてもそれは真の対立ではないというようにライプニッツは見る傾向がある。

ライプニッツを一言で言うのは難しいが、強いて言えば「違いというものを保存した調和」ということになると思う。なぜ調和がもたらされるかということ、違いがあってもそれは Point de Vue から同じ世界を見ている、同じ宇宙を映現しているからである。それぞれは Point de Vue が少しずつ違う。かなり違うものもある。しかし、同じ宇宙を映し出しているという点では同じである。どういう個人も同じ人は二人と居ないけれど、それでも調和できるのは宇宙を映現しているからだ、一言で言うと、そういうところがライプニッツの本質ではないかと思っている。

Q3 ライプニッツは宗教の統合をどう考えていたのか

ユダヤの集落にいたスピノザが多大な影響を与えたという意味では、ライプニッツがスピノザと会ったのは劇的なことだったのではないかと。ユダヤ教がプロテスタントとカトリックが分れる前の宗教であり、今では、昔のユダヤ教が日本にも入って来ていたのではないかと、景教と言われたいのではないかという話が出ていて、若い人たちの間でスピリチュアルが語られ出している。もちろん仏教の「色即是空」もあるが、「大いなる一」や「あなたは私 私はあなた」などのスピリチュアル的なもの、斉藤一人が発信していることも、結局は大いなる神の天之御中主神、ユダヤ経ではヤハウエと呼ばれ、こちらでは釈迦と呼ばれているもの、今は宗教の統一などの話もある。

丸山修寛という医者が縄文時代のカタカムナを使った治療をしているが、量子力学やオーラ等を科学的に分析し、粒子の振動等で病気が良くなるとか、絵を貼るだけで良くなるとか、そういうことを発信している。カトリックでも教会のドームのステンドグラスから光の粒子が入ってきて癒されるとか、そういうものが昔から本質的に人間の中にはあったのではないかと。斉藤一人も「これからは科学等が統合される時代、すべてのことが全部分かる時代だ」と言っているが、ライプニッツはるか昔にそれに気付いていたのではないかと、今こそ脚光を浴びる人ではないかと感動した。

(田島)

ライプニッツは確かに宗教を統合しようという情熱を持っていた。少なくともキリスト

教会を統合しようということを実践的な政治的な目標として行っていたが、だからといって彼はイスラム教や仏教を敵に回そうと考えたわけではない。政治的には、少なくともヨーロッパの安全を守るためにオスマントルコと対立しなければならないとは考えていたが、例えば、中国思想の老子や孔子の思想にも大いに注目しており、そういう意味では、ライブニッツはもし寿命があれば、全世界の宗教や精神世界をますます深めていけば宗教的な統合は可能だと考えていたと思う。

しかし、私はそれには必ずしも共感しない。ライブニッツは素晴らしいけれども、統合を簡単に考え過ぎている。これは悪の問題とも重なるが、違いというものが重要である。スピノザはユダヤ教会から排斥され、キリスト教徒の友人のグループの中で辛うじて命をつないでいくことができたし、表現活動もできたが、それは当時のオランダのブルジョワのリベラルな人たちが彼を支えたからである。しかし、ユダヤ教とキリスト教の間にも相当な違いがあると私は思う。

スピノザを取りまく亡命ユダヤ人の場合を考えてみよう。逆説的なことに、アムステルダムのユダヤ教会は必ずしも大昔から続いている伝統的なユダヤ教ではない。アムステルダムでもイングランドでもそうだが、皆が亡命してくる。特にスファラディはスペイン系の亡命者で、アシュケナジーが東方系の移民なので、スペイン系のユダヤ人と東方系ではかなり違う。

スファラディというスペイン系のユダヤ人の生活や経験を見ると、スペインの中で領土回復運動が100年以上続き、1492年にグラナダが陥落してようやく領土回復運動が完結するが、その前後に激しいユダヤ人排斥運動が起こる。これは『ドン・キホーテ』の中に克明に描かれており、火あぶりの刑を逃れるために自らカトリック教徒に改宗したユダヤ人たちは、表面上はカトリック教徒になるが、心の中ではユダヤ教を守り続けてアブラハムの宗教に留まっていることが多い。本当にカトリックになる人もいるが、そういう人たちも周りから怪しい目で見られる。つまり、在日朝鮮人のようなもので、他人の目が冷たい。そういう自分の宗教を守り続けたり、カトリックになったりする人の中で、「マラーノ(豚野郎)」という蔑称を浴びながら、それでも内面のユダヤ教を守り続ける人が何十年もそういう生活をしていると、自分の宗教についての内面的反省を深めていく。彼らは宗教意識が非常に高く、ユダヤ教の元々の在り方とかなり違ってくる。

つまり、元々ユダヤ教は生活宗教のようなもので、日々の掟、法律のようなものであり、その法律に従って道徳的に生きることがほとんどすべてであった。その法律がどのように制定されたかという歴史も学ぶが、そういう生活の中で生きられた形の掟がユダヤ教の本来の形である。ところが「マラーノ」と言われた人たちには、そういう本来の形がなくなっている。共同体がないところに信仰心だけがあるので、信仰心の宗教になっていくのである。つまり、内面的な反省の宗教になる。自分はユダヤ教徒のつもりだが、いつの間にかキリスト教徒のような内面的吟味を始め、「自分はいかにしてこの社会でユダヤ教徒であり得るか」ということを繰り返し吟味し続けるのである。

そういう人たちがアムステルダムに来ると、自由な場所で自由にユダヤ教に復帰できるようになるが、長年の習慣でユダヤ教の作法を忘れてしまっているのが、外国人のユダヤ人を招いてユダヤ教の先生になってもらわなければならない。ところが、自分は内面的な深い決意を持ってユダヤ教を守ってきたにも関わらず、先生方は表面的で形式的なことばかり言うので、幻滅してしまい、それによって改宗ユダヤ人に内面的な葛藤による激しい揺り戻しが起こる。「いつの間にか自分はキリスト教的な内面宗教としてユダヤを信じていた」ということになり、せっかくユダヤ教を自由に信仰できる社会になったのに、そこからキリストに改宗してしまったりするのである。そうするとユダヤ教会の中では生きていけないので破門される。

したがって、キリスト教のメンタリティとユダヤ教のメンタリティは大きく違うと考えた方がよいと思う。ユダヤ教のメンタリティにおいては「神が直接私たちにメッセージを伝えてくれる」ということがユダヤ教的な本質である。それはモーゼに対して十戒という形で神が語ったこと、あるいはアブラハムと神が直接契約を結んで、神のメッセージを直接受け取れるということである。この点で、ユダヤ教はいくらかプロテスタントに似ている。これら両派は、律法原理主義に傾きやすい。

ところが人間には、神のメッセージを誤解してしまうことがある。誤解するという経験からキリスト教は生まれている。つまりキリスト教は、神のメッセージを自分で理解したつもりだったが、何も理解していなかったという、挫折の経験から立ち上がるしかないというのが本質である。十字架というシンボルは、その事を象徴している。したがって、神のメッセージを自分はこう考えるけれども、他人は違うように考える可能性が大いにある。これは神のメッセージを各人が各様の文脈で受け取ることができるということだ。そうだとすると神のメッセージを記したテキストも、その当時の文脈とは違う文脈でも生かせるという事になる。つまり、イエスの時代、パレスティナの文化に即して理解されることが唯一絶対ではない。最近「ピリオド奏法」と言って、演奏様式はもちろん、ピッチや古楽器まで揃えて、古い音楽を再現しようとする試みがある。歴史の勉強は必要だが、それは絶対ではない。あらゆる原理主義は信仰の敵である。同様にあらゆる権威主義・伝統主義は権威や伝統に対する信頼の欠如を意味する。『使途行伝』では、神のメッセージが聖霊という形で各自に下るが、そのメッセージは各人各様に各国語で述べ伝えられたと書かれている。そうになると、自分自身の言葉で語る事が可能だし、それしかできないので他と一致する必然性はない。

つまり、神の言葉というのは皆が「絶対にこれだ」と言えるものではなく、「このようであるかもしれないし、あのようであるかもしれない」というものである。長い時間がたつたといと、その真意はわからない。そして、本当に神のメッセージだと分かるのは、愛と信頼の共同体の中において互いに隣人愛を実践することをおいて他に神のメッセージの明確な基準はないと、そういう立場にキリスト教徒は立っている。「神が本当は何を望んでいるのかすぐには分からない」という立場に立っているわけである。そういうものが、ユダヤ教もキリスト教も同じだとか、イスラム教も似たようなものだと言ってしまうと、ニュアンスがな

くなる。

したがって、ライブニッツのようなものを目指すのは、寛容の精神としては理解できないことはないが、宗教の本質がそれだとは言えないと私は思っている。仏教についてはよく知らないが、その場合も「違い」ということが重要だと思う。

Q4 いかにして今の社会にライブニッツを生き返らせることができるのか

『華嚴経』に「インドラの網」という例えがあり、合わせ鏡のイメージにつながるので、『華嚴経』とライブニッツの間にはつながりがあるのではないかと思う。存在論、実体論で物事を考えると難しくなるので、知識論、知性論という立場で考えると納得しやすいのではないか。一人の人の発想がいろいろな人との間でつながっていくという、現在のネットワーク社会にも通じる考え方でもある。したがって、モノ論を知識論としてもっと精緻化させることによって、ライブニッツを今に生き返らせることができるのではないか。

(田島)

その通りだと思う。ライブニッツを我々の社会に直接生かそうとすると、そのような方向がかなり有望だと思う。我々は一人一人がモノ論として、それぞれ違った観点から世界を映現しているから、それぞれが補いあって神の全知に接近することができる。ライブニッツの「予定調和」は仏教のインデラ網に近い考えだと思う。しかし、では存在論として生かせないかということ、その道もなくはないように思う。

「存在」とはそもそも何かという議論になるが、それは「存在」を考えるポイント(実質)が何かという問題になる。「実在する」とはどういうことなのかということ、例えば、我々は「鬼ヶ島は実在していない」と思うが、「佐渡島は実在している」と思う。その違いは、佐渡島への行き方は様々にあるということである。つまり、佐渡島へはウラジオストクから船に乗って行くという行き方や、新潟港から渡る行き方など、違う方法で行っても同じ佐渡島に到達する。ところが、鬼ヶ島への道はどこなのかということ、恐らく岡山から船出しないと行けないと思うが、そこが鬼ヶ島なのか、小豆島なのかははっきりしない。確かに鬼ヶ島に行ったのか、実は小豆島にしか行っていないのかという違いがある。この違いを探求することができるのか、あるいは、どちらかが正しくてどちらが間違っていると言えるのかと考えると、恐らく鬼ヶ島には正しい行き方があるとは言えないと思う。

それは桃源郷のようなものだと思う。ある時、夢を見て桃源郷に行くが、別の時にまた桃源郷の夢を見たとしても、2回目に見た桃源郷は美女がたくさんいるところではなく、非常に酷いところで辺り一面が汚物だらけで「これが果たして桃源郷なのか」と思ったとする。その時に「同じ桃源郷に行ったけれど、数年経つうちに環境汚染が酷くなっていた」と言えるのかどうかという点で、これは意味がないと思う。つまり、我々は「桃源郷は実在しない」と考えるからである。実在しないということは、桃源郷への行き方が夢という単線のルートしかなくて、二つの夢を見た時に同じ場所に違うルートで行ったとは言えないからである。つまり、夢というルートが一つひとつ別であれば、それは違う場所になってしまう。そうい

うものに対して、我々は「実在」と言えるポイントがないと思う。

では「実在」とは何かと言うと、「実在」から到達するルートがあること、あるいは「実在」するものからそこへと、どの「実在」からも行けるルートがあること、しかもそれが同じ「実在者」であるというポイントがあることが「実在」の内実だと言える。例えば、 $2+2$ と $3+1$ は同じ答えになる。 $2+2$ のルートを伝って行く存在と、 $3+1$ というルートを伝って行く存在がどちらも 4 という同じ存在に行き着いているわけであり、ルートが違って、違うルートを通じて同じものに行き着く場合はこれを「実在」と言うことができる。4 という数字は手で掴んだり見たりできなくても、違うルートが同じものに到達するという事に大きなポイントがあれば、数というのは実在すると言って全く差し支えない。

そうすると「実在」とは実在から実在へと、次から次へとリカーシブ（再帰的）に到達するものということになる。つまり、どこか一つでも「実在」という場所があれば、その場所から到達できるものはすべて「実在」ということになるので、すべての「実在」は地続きになる。そうすると、結局は「実在」と言えるものは一つのかたまりを為して、実在的連関を形成している。例えば、ここにあるコップが実在しているか否かということは、初めは怪しいかもしれないが、見ることができるので視覚を通じて到達できるし、触って到達するルートもある。この2つのルートで到達するコップは同じコップである。そうすると、コップのイメージというようなものよりも、コップそのものの方が実在的である。コップのイメージというのは、私が抱いているイメージと他人が抱いているイメージが同じイメージに到達しているかどうか怪しいので、そういうものは実在性が希薄ということになる。

これこそ「実在」に対するスピノザ的な実在観だと言える。スピノザは「実在」から「実在」へと「実在」のネットワークをつなげていくと、結局は一つの「実在」しかないと言っている。つまり、実在者は実在者の部分でしかないという考え方にたどり着いたわけである。したがって、世界と言っても良いし、宇宙と言っても良いし、実体と言っても良いが、その「実在」をただ一つとしてスピノザは「実体は一つ」と言う。これをスピノザは「神」とも呼んだ。

もう一つの全体は「思考」である。ある「思考」と他の「思考」は有意味な連関を持っているという点で、それを概念や言語と言っても良いが、それらが相互に密接に結びついて一つの体系を成している以上、観念や思考や概念や言葉というのは一つの全体と言える。この一つの全体と言えるような「観念」の世界と、他方では物体のような自然的「実在」の世界、この二つの「実在」をスピノザは考えたわけである。

では、これは両方とも別々に存在しているのかというと、スピノザは一つの全体の二つの側面と考えて、これを「全体論」という形でまとめることができると考えた。そうすると、飛躍になるけれども、これは同じではないかと考えて、「実体」とは一つは自然的な事物の世界であり、もう一つは観念という一つの全体であって、この全体は一つの「実在」の二つの側面でしかないスピノザは言うに至ったわけである。したがって、スピノザの形而上学は、一つの実体だと言っているのは、結局、実在的連関がどういうものなのか、実在的連関

によってこそ実在性の意味が担保されるという、つまり、実在性は実在的なものから手を伸ばせるものだというリカーシブな定義となっている。

例えば、実在性というのは単一の性質で与えるのはあまり良い筋ではない。バークリーは「存在とは知覚できることだ」と言ったが、これは単一のやり方で、実在の性質は一つだと決めている。つまり、知覚できるならそれは「実在」だというタイプの考えだが、そういうタイプの考えをとると、数や三角形などは知覚できないし、考えることしかできないので実在しないことになる。したがって、このような考えは実在のすべてを網羅するには拙劣なやり方である。

ところが「実在」というものが何かを、取り敢えずペンディングにしておくという考えをスピノザであれば取ることができる。何が実在していても良いが、本当の「実在」は実在から実在へと連関できることだとしておけば、例えば、幽霊が実在者であれば、人間と幽霊の間に実在的連関がつくはずである。あるいは、柳と幽霊との間に空間的連関がつくはずである。これがつけられないのであれば、幽霊は実在しているとは言えない。例えば、柳の下に幽霊がいると言っても、いるように見えるだけであって、その柳の所へ行って柳と幽霊の間が何十 cm 離れているかを測ることができないのであれば、これは実在性に乏しいということになる。もし柳が実在しているのであれば、幽霊は柳との間に実在的連関で結ばなければならない。

そういう考え方をすると、「実在」という性質を取り敢えず「これだ」と決めつける必要はない。もし、それが実在しているとすれば、それとこれは実在として結べるということである。そうすると、実在しているものは取り敢えず一つの全体という形で「実在」が定義できることになる。これがスピノザ的な実在観念である。

ライプニッツの考えはそれと違うものではなく、そういう形でモノドとモノドはインドラ網のような形で結びついている。したがって、スピノザの宇宙とライプニッツの宇宙は非常に似ている。違うのは Point de Vue という観点であり、観点という観念がスピノザにはないが、ライプニッツにはある。なぜかという、グローバルスタンダードに立たないからである。スピノザはアムステルダムという世界の中心にいたために周辺部が見えていなかった。ところが、周辺にいたライプニッツはいかに周辺が違うかということが見えていたので、グローバルスタンダードを初めに決めて「世界はこれだ」とは言わない。その特質性を保存しながら調和を図ろうとする、これがライプニッツのスピノザと違うところである。

Q5 臨床心理学における無意識についてライプニッツをどう考えるか

無意識とモノドロジーと華厳という三つのテーマがあるが、私が一番関心を持ったのは無意識思想である。私は臨床心理学を専攻しており、私たちの専門性では無意識という概念が最も重要である。その出発点がライプニッツであることは知識としては知っているが、臨床心理学ではライプニッツの影響はほとんどないし、ライプニッツと無意識の関係をほとんど知らない。そういう意味では、臨床心理学に無意識の考え方が蔓延していることを、ラ

ライブニッツはどう思うと思われるか。

(田島)

せっかくライブニッツと無意識をつなげる話をしていたが、実は、私はライブニッツには反対である。無意識というのは、ライブニッツが考えるような単純なものではないと思うからである。

ライブニッツの考え方に比較的近いのはベルクソンの無意識の考え方である。ベルクソンは純粋記憶という概念をつくったが、それは我々が普段は意識していないけれどもある瞬間に出てくるもので、例えば、プルーストがマドレーヌを食べた瞬間に過去の思い出が蘇るという経験を書いている。それが純粋記憶の典型であり、走馬灯のように過去の記憶が出てくるとベルクソンは語っているが、それはライブニッツに近い。ライブニッツの記憶とは、そのように純粋記憶のような完全な形で全記憶が保存されていると彼自身も言っている。

ただ、現在の臨床心理学でどのような扱いを受けているかは知らないが、フロイトの無意識はそういうものではないと思う。どこが違うかということ、抵抗や抑圧等によって抑圧機構が働いて無意識を抑圧している。どういう形で抑圧するかということ、恐らくは捻じ曲げて暗号のような形にしている。つまり、一応はまともな内容を持った情報があるとしても、そのコードを変えて暗号のようにしてしまうのである。したがって、その暗号のカギを手に入れると元の内容が復元できるが、それがなかなか復元できないような形で暗号化している。そういう無意識をフロイトは考えたと思う。そういう形で力動的な無意識、つまりシニフィアンと言ってもよいが、意味する記号列が本来の文脈と違った文脈に置かれることによって違う意味が発揮されるような記号列がフロイトの無意識である。

例えば、フロイトは誰かの家を訪ねる時に間違っ上りの階に行ってしまったというしくじりをしたことがあるそうだが、そういうしくじり行為はそれ自体に何の意味もない。しかし、実は「とかくやり過ぎる」という非難を被っていたフロイトは、例えば、他人の「攻撃し過ぎる」という非難に対して「その批判は不当だ」「悪い奴を攻撃して何が悪いのか」と普段から思っているので、その「自分はやり過ぎる」という行動によって、友だちの家を歩き過ぎてしまうという行動をしくじり行為としてやってしまうわけである。つまり、しくじり行為は通常の意味からすると意味がないが、そこにある文脈を差し入れることによって、実は批判に対する反論をしているという意味が現れてくる。そういう無意識をフロイトは臨床心理学的に取り出してきたと思う。

私はどちらかというと、そういう言語やシニフィアンを介した文脈について、複合的な文脈の中で隠されていたものを暴き出すような無意識の方が臨床学的には意味があるものだと思っていて、それをベルクソンやライブニッツや、あるいはプルーストの場合もそうだが、ただマドレーヌ菓子で思い出が湧出したというようなものとするのは、無意識のもつ力動性を軽視することになる。そういう点では、無意識の問題に取り組むためにはライブニッツは不十分だと思っている。

発行日	2024年1月31日
講演著者	田島 正樹
編集発行	公益財団法人 国際高等研究所 <「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局
編集協力	アトリエ アロ 大仲佐代子

ISSN 2759-0577



満月に照らされて浮かぶ「ゲエテ」の胸像
(国際高等研究所庭園)